

内モンゴル高原における砂漠化の一要因 経済史の観点から一

烏 力 吉 図

要 旨

内蒙古大草原の沙漠化已引起了周围国家的注目。2002年の春天，从内蒙古沙漠地区掀起的黄沙越过大海，刮到了日本列岛。日本各新闻媒体相继报道了有关情况。

古称“天苍苍野茫茫，风吹草地现牛羊”的内蒙古大草原为什么变成了无边的沙海，这不得不让人沉思。

本论文从经济史的观点上，探讨了内蒙古大草原的沙漠化形成原因，从地区和时间上可分为以下三个内容：

阿拉善高原：从汉到唐时期的开垦和沙漠化。

鄂尔多斯高原：两汉时期的开垦和三大沙漠的形成；清・民国时期的开垦和三大沙漠的扩大。

察哈尔地区和科尔沁大草原：清・民国时期的开垦和沙漠化。

キーワード.....内モンゴル高原 遊牧民族 中原漢人農民 開墾 砂漠化

はじめに

土地の砂漠化は、世界中で幅広い関心が寄せられている。世界の3分の2の国・地域は砂漠の害を被っており、十億近くもの人口は砂漠化の影響を受けている地域で暮らしている。砂漠化の進行は、重要な生態環境の問題を引き起こしている。

中国は世界でも砂漠化問題が最も深刻な国の一つである。砂漠化の土地面積は262万2千平方キロで、国土面積の27.3%を占め、全国の総耕地面積を上回っている。全国の土地の砂漠化は、毎年2,460平方キロのスピードで広がっている。

内蒙古自治区は中国の東北、華北、西北にまたがっており、北京、天津地区に隣接する重要な生態防御線である。同自治区では砂漠化した土地の面積は自治区の総面積の約60%を占め、土地の砂漠化は、毎年平均約66万ヘクタールのスピードで拡大している。自治区の3分の2の農地と60%の牧草地が風砂による被害を被っており、中国では砂漠化が最も深刻化した省(自治区)のひとつとなっている。

「内蒙古」という名称は、清朝の時の「内扎薩克蒙古」という行政区域の名前からきたもの

である。内蒙古高原は昔の匈奴・鮮卑から今の蒙古族までのアジア北方諸遊牧民族の政治舞台となっていた。牧畜業と狩猟は遊牧民族の主な産業であり、彼らはそれを生かして中原農業民族と積極的に貿易取引を行っていた。

しかし、それは、遊牧民族は農業について知識を持ってないという意味ではない。文献記録によると、9世紀の室偉・10世紀の契丹・13世紀の蒙古はいずれも内蒙古東北地区のハイラル川・エルクナ川に沿った地域で農業を営んでいたという。今、これらの地域には有名なホルンブイル草原が広がっている。このことは、遊牧民族の農業経営が、牧畜・狩猟を主な産業にした遊牧社会では、牧畜・狩猟による生産の不足を補う意味をもつ補助的な産業として存在するにすぎず、自然環境を破壊するほどの規模ではなかったことを意味している。

内蒙古高原が砂漠化した原因については、「無理な開墾」と「過放牧」という二つの説が有力である。私は、「無理な開墾」が草原を砂漠化した根本的原因であると考えたとともに、その「無理な開墾」の原因を中原漢人農民の内蒙古高原における大規模な農業開発に求めた。そのことを本稿の中で経済史の観点から考察する。

「過放牧」は、実は現在中国の市場経済の下で現れてきた新たな社会的現象である。農業に草原を奪われた遊牧民たちは、その残されたわずかの草原に依存して生きるしか道がない。そして、放牧地を拡大することによって家畜を増やし、収入を増やす道がすでに閉ざされていることから、遊牧民たちは、所与の草原で家畜の数のみを増やして収入を増やす道を選択した。これが、草場がその許容量以上の家畜を育成しているという意味での「過放牧」の現象である。「過放牧」が「砂漠化」を進めるというのは、「過」に原因があるのではなく、農業開発によって草原が縮小して「遊牧」ができなくなったことの結果であることに注目しなければならない。したがって、「過放牧」は「砂漠化成因」の一つではなく、むしろ、人間社会が産み出した「砂漠化」の帰結として考えるべきである。

本論に入る前に、農業開発と蒙古高原の砂漠化との関係について、若干言及しておきたい。地理学が明らかにしているように、蒙古高原の表土の質は薄く、軟らかく、砂漠化しやすい。黄河以南の地方と比べると、一年中風が多い乾燥地帯に属する。そのうえ、漢人農民の開墾はすべて焼き畑であり、たとえば、3～4年たつて土地の力がなくなると、その耕地を廃棄し、別の場所に移動して、新たな焼き畑を造る。廃棄されたかつての耕地は、雨や雪が少ない年であると、風に吹かれてすぐに砂漠化が進む。一方遊牧民族は、蒙古高原のこの地理的特徴をよく把握している。「遊牧」という生産方式で牧畜業を営むのは、草原を守って、砂漠化を防止するためである。

漢から唐にかけての時代に、アラサン高原とオルドス高原は対照的な経過をたどった。二つの高原はともに漢人農民たちが農耕活動をおこなったが、オルドス高原のばあい、匈奴・鮮卑・突厥といった遊牧民族が南下してオルドス高原を含む漠南地区を支配した。それにもない経済面では、牧畜業が復活した。そのことによって、オルドス高原の自然環境は、アラサン地区

と違って、一時草原が回復された。遊牧が自然環境を守る一例である。

清朝・民国時代については、内モンゴル西部オールドス高原から東部ホルチン草原までの地域における大規模な開墾と、その開墾によってもたらされた環境破壊を中心に研究した。

蒙古学研究は、蒙古の歴史・文学・言語・宗教・軍事・経済・社会制度・国際関係などを含む幅広い研究である。しかし、今までの蒙古学研究では、内モンゴル高原の歴史における地方経済の変化と、その変化によってもたらされた環境問題についての研究はほとんど存在しない。この論文によって、内モンゴル高原が直面する環境問題について、経済史の立場から新たな貢献をおこないたいと思う。

第1章 漢から唐までのアラサン高原とオールドス高原における開墾

第1節 アラサン高原における開墾

1、両漢時代におけるアラサン高原の開墾

昔のアラサン高原の自然環境は今のとは全くちがって、祁連山の豊富な水に恵まれた広い美しい草原地帯であった。前漢以前のアラサン高原は匈奴の土地であったが、前121年のころ、前漢の武帝がこの地域で武威・張掖の二つ郡を設け、多くの中原漢人農民を移住させて草原を開墾し農業生産の増加を図っていた。いわゆる「移民実辺」政策である。文献と考古発見によると、前111年に漢政府は、上郡、西河及び河西などの郡で相次いで田官を開き、約60万人が耕田していた¹⁾。しかも、武帝の末年に行った新農法も、呼和浩特平原からエチナ流域まで普及していたという²⁾。こうして、漢の武帝の時代に朔方、西河、酒泉、河西などの郡の地(ほぼ今のオールドス高原、河套地区とアラサン盟地区にあたる)で、すでに、溉田が完全に設備された³⁾。さらに、漢代の張掖郡に属する居延県の遺跡から有名な「居延漢簡」が1930年に発見され、多くの事実が明らかになった。その内容は、武帝末期から後漢初期に及び、対匈奴の防備の前線基地であった居延の兵員配備や食糧支給などを中心とする文書及び防塞相互間の往復文書などであるが、その中から、漢昭帝時代の屯田関係の木簡が多数発見された。それは、戍卒・田卒・河渠卒などの軍士の名簿であり、かれらの出身地は山東地方が多い。超過の新農法(代田法)も、この漢簡から発見された⁴⁾。

こうした文献記載と考古発見から、前漢時代に、アラサン高原ではすでに農業設備が整備され、大規模な農業生産が行なわれるようになっていた。アラサン地区は、漢の西方地方における主要な農業生産地の位置に置かれていたことを推測できる。

後漢時代は、前漢時代と同じく、三十分の一税が復活されたほか、軍士の糧食の補足を図るために、前漢昭帝の「屯田政策」が再び実施された⁵⁾。このことは、もとは匈奴の右賢王渾邪王の故地であった武威、張掖、酒泉、敦煌の河西四郡のアラサン地区が、後漢の時にも軍が屯

内モンゴル高原における砂漠化の一要因（烏力吉図）

戌して屯田を行い、開墾していたことを示している。2世紀から3世紀への変り目のころ、後漢政府はアラサン盟エチナ地域で新たに西海郡を設置し、これが、曹魏・晋代まで踏襲された⁶⁾。

河西四郡のアラサン地区は、元々は、祁連山に恵まれて水が豊富で牧草がよく茂る匈奴の遊牧地であった。しかも、匈奴が天を祭るところでもあった⁷⁾。しかし、両漢及び魏・晋にかけての長期的大規模な開墾・屯田がこの辺の地域の生態を破壊し、土地を荒廃し、いまのような、あたり一面荒れたところになってしまった。

2、鮮卑北魏時代におけるアラサン高原の開墾

439年北魏が北涼国を滅ぼした。この結果、内蒙古のアラサン盟地区では再び遊牧民族の支配が回復された。この回復において人口に変動がみられた。

中原王朝の採用している地方行政単位の相互関係は「州 郡 県」の関係である。そして、漢から北魏までのアラサン地区における各王朝の設置した行政単位とその人口を比べてみると：

前漢…武威郡、張掖郡の二つの郡を設置した⁸⁾。

武威郡：匈奴の休屠王の故地。県 10。戸 17,581；人口 76,419。

張掖郡：匈奴の渾邪王の故地。県 10。戸 24,352；人口 84,731。

計 県 20；戸 41,933；人口 161,150。

後漢…武威郡、張掖属国と張掖居延属国の三つの郡を設置した⁹⁾。

武威郡：県(城)14。戸 10,042；人口 34,226。

張掖属国：県(城)5。戸 4,656；人口 16,952。

張掖居延属国：県(城)1。戸 1,560；人口 4,733。

計 県(城)20；戸 16,258；人口 55,911。

魏・晋…魏と晋の時、河西では涼州を設け、そのうち武威郡、張掖郡と西河郡が内蒙古のアラサン地区を含んでいた。

武威郡：県 7。戸 5,900。

張掖郡：県 3。戸 3,700。

西海郡：県 1。戸 2,500。

計 県 11。戸 12,100¹⁰⁾。

北魏…河西地区で涼州を設けた¹¹⁾。

涼州：郡 10。戸 3,273。

武威郡：県 2。戸 340。

この数からみると、北魏の時代にアラサン地区での人口が大幅に減少していることがわかる。北魏時代、人口は山西と河南の二つの省に集中していた。

3、隋王朝時代におけるアラサン高原の開墾

隋王朝はアラサン地区に武威郡と張掖郡の二つ郡を設けていた。この二つ郡における当時の人口は、それぞれ 11,705 戸と 6,126 戸であった¹²⁾。この数は北魏の涼州の総人口を大幅に上回っており、武威郡の人口の 34 倍以上となった。この人口増加は、隋の時代にも、突厥、吐谷渾の勢力を防止するために、アラサン地区では「移民実辺」政策が実施されていたことを示している。そのうえ、隋朝の武威郡と張掖郡はそれぞれ、いまのテンギリ砂漠の大部分とエチナ川流域、バダンジラン砂漠の西端地域を統轄していた¹³⁾。隋の時代には、いまのテンギリ砂漠地帯とエチナ川流域バダンジラン砂漠西端地域で多くの農業人口が集まり、耕作をしていた。農業が広がっていたことから、今とは大きく異なる自然環境であったことが推測される。

4、唐王朝時代におけるアラサン高原の開墾

唐王朝は内蒙古のアラサン高原に甘州と涼州の二つの州を設けていた。甘州と涼州というのは、それぞれかつての張掖郡と武威郡のところである¹⁴⁾。甘州の 8 世紀中期(天宝年間)の人口は 120,281 人、涼州の同時期の人口は 22,092 人に達し¹⁵⁾、以前の人口よりも増加している。

内蒙古のアラサン地区は、西域と漠北を結ぶ唯一の重要なルートである。そのことから中原王朝と草原帝国の間でアラサン地区を争奪してきた。中原王朝が支配したときは、長期にわたって軍を駐屯させて防衛してきた。唐代のとき、甘州・涼州の 2 州に赤水軍、大頭軍、寧冠軍、花門山保などの軍事基地を作り、軍を駐屯させていた。加えて、軍に食糧を供給するために中原からたくさんの農民をこの地域に移住させて農業に従事させるという、いわゆる「移民実辺政策」を図っていた。

内蒙古アラサン地区は、両漢から隋・唐まで、中原王朝と北方遊牧民族の間で争奪する焦点となっていた。そして、今のエチナ河流域、バダンジラン砂漠西端に位置する幅広い面積の地域と今のテンギリ砂漠のところは、その時代の大規模な農業生産の現場であり、多くの農民がこの地域に集中して耕作を行っていた。

このような長期にわたる大規模な開墾は、環境の破壊、生態系の荒廃を招き、表土が流れて砂漠化が進んだ。その結果、耕地が砂漠に埋れてしまうことになり、今のようなバダンジラン砂漠とテンギリ砂漠が形成されたと考えられる。

明の時代に入ると、中原王朝の一つである明王朝はアラサン地区での居民が極めて少ないことから、この地区で軍民合併の永昌府を設けた¹⁶⁾。これは両漢から隋、唐までの各中原王朝の中では例外のことであった。明代のアラサン地区における人口減少とそれに応じた行政組織の変化は、明代のアラサン地区で砂漠化が進み、耕地が埋れ、大量の農民が耐えられずに逃亡するほどの環境変化があったことを示していると考えられる。

第2節 オルドス高原における開墾

1、漢時代におけるオルドス高原の開墾

オルドス高原は匈奴の「河南地」であり、もとは匈奴が居住していた。前127年に前漢が匈奴の白羊王を撃退して、オルドス高原を占領し、その地域に朔方郡・五原郡・上郡・西河郡の四郡を設けた¹⁷⁾。漢王朝はオルドス高原の四郡のところに多くの中原漢人農民を移住させて草原を耕地にする農業政策を実施し、その地域における統治を固めたという。文献によると、前127年、漢の武帝は中原の農民10万人を朔方郡に移住させた¹⁸⁾。そのあと、前120年に、山東地方の貧民70万あまりの人口を朔方郡の新秦中(今のオルドス高原の南部地区)に移住させたという¹⁹⁾。そして、『史記』の中で、漢武帝年間に、オルドス高原では、すでに、漑田が完全に整備されていたと指摘されている²⁰⁾。

前51年と前48年に漢王朝は雲中・五原の二つ郡から大量の食糧を運び出して匈奴の呼韓邪単于を救済したという²¹⁾。このことは、漢代の内モンゴルの西部地区が漢の北方における主要な農業生産地になったことを表している。

朔方郡に属する三封、窳浑と临戎の三つの古城附近では、一万以上の漢の墓が分布している。これは、漢の時代に、この辺ではたくさんの農民が居住し、農業生産を行っていたことを示している。考古調査によると、三封などの三つの古城及び墓群の分布しているところの90%はウランブ八砂漠の下に埋れているという。これは、漢の時代に、この周辺の環境が今のような砂漠が広がった自然環境とは全く違った環境であったことを説明している。

西河郡に属する富昌古城の遺址の周りにもたくさんの漢墓が分布している。墓の中及び涸れた河、砂地から製鉄農具がたくさん発見された²²⁾。このことは、漢代のオルドス高原では大規模な農耕地が開かれていたことを示している。その耕地に多くの漢人農民が働いていて、オルドス地区が漢の北方地区における重要な食糧生産地となっていたのは間違いない。

2、匈奴・鮮卑・突厥諸遊牧民族の南下とオルドス高原における自然環境の回復

50(後漢建武26)年、南匈奴単于が漠北から南下して漠南地区に入った。単于は西河郡に牧住し、朔方、五原、雲中、北地、定襄、代郡、雁門などの郡の地、つまり、今のオルドス高原、河套地区、呼和浩特平原とウランチャブ高原の南部地域では南匈奴の部族が遊牧していた²³⁾。

後漢桓帝の時、鮮卑の檀石槐が鮮卑諸部族を統一して強大な統一国家を建てた。檀石槐の国土はかつての匈奴帝国の領域のすべてを含むものとなっていた²⁴⁾。後漢の霊帝年間、後漢の北辺は連年鮮卑に侵寇され、オルドス地区などの地域で遊牧していた当時の漠南の匈奴も応援し漢から離反した²⁵⁾。このことは、漠南地区における漢の統治が揺れ始めたことを示している。漢王朝は北方遊牧民族の勢力と対抗する力を徐々に失い、そして、215(献帝建安20)年に朔方、

五原、雲中、定襄、上郡の五郡の地を放棄したという²⁶⁾。こうして、内蒙古高原の漠南地区は完全に鮮卑・匈奴の諸遊牧民族が支配する遊牧地となった。

檀石槐の後、比能が西部鮮卑、步度根と東部鮮の三部鮮卑を統合し、そのうち西部鮮卑がオールドス高原を統轄し遊牧していた²⁷⁾。五胡十六国の時、オールドス高原は南匈奴赫連勃勃の支配地となっていた。383年に拓跋鮮卑は北魏を建て一連の征服戦争を実施した。427年に北魏はオールドスの南匈奴の勢力を平定し、金銀製品などの奢侈品以外に馬30万余匹、牛・羊数千万頭を得たという²⁸⁾。

『魏書』食貨志によると、オールドス高原は北魏の重要な牧畜業の地として伝えられている。唐の時代、河套・オールドス地区で靈州、塩州、夏州、勝州、宥州、豊州などの6州を設置し²⁹⁾、10万余の東突厥部族がその6州のところに駐牧し遊牧していたという³⁰⁾。

後漢から唐にいたるまで、匈奴・鮮卑・突厥の諸遊牧民族が南下してオールドス高原を支配することと、それにともない、この地域における牧畜業の回復により、前漢の時に大規模な開墾によって破壊された環境は、徐々に回復されたと考えられる。これは、アラサン高原とは全く違う歴史である。

第2章 清代以降の内蒙古高原における開墾

第1節 清代の内蒙古高原における開墾

1、内蒙古の西部地域における開墾

呼和浩特上黙特地区の開墾：呼和浩特地区が開墾された時代は早い。北元のアラタン・ハンのときには、この地域ではすでに半農業半牧畜業が形成されていた。それが清代に入ると、清王朝の「借地養民政策」により、中原の漢人農業貧民たちは再び蒙古へ入り始め、草原が著しい速さで農地として開墾された。農民たちの出身からいうと、呼和浩特地区に入った漢人農民たちは、主に陝西、山西二省の貧民であった³¹⁾。1743(乾隆8)年の清朝の統計によると、呼和浩特地区の総土地面積は75,048ヘクタールであり、そのなかで開墾された草原の面積はすでに60,780ヘクタールに達し、残された牧場の面積はわずか総面積の約5分の1しか占めてなかったという³²⁾。50年後の1795(乾隆60)年になると耕地はさらに北上して陰山を超え、陰山北麓8旗の牧場地6,955ヘクタールをも開墾して農地にしたという³³⁾。

陰山北麓の牧地を開墾したことは、陰山南麓にある呼和浩特平原がすでに農業区に転回され、開墾する草原がなくなったことを示している。そして、1795年前後には、牧畜業は呼和浩特平原から姿を消した。このような開墾により、草原が急激に大幅に縮小して、遊牧民が遊牧をできなくなり、多くの遊牧民はやむをえず遊牧産業から農業へ転じざるをえなかった。

蒙古地区に大量の漢人農民たちが入ったことから、清王朝は蒙古地区で庁県制を設置し、漢

人農民たちを管理させた。そして、蒙古地方では漢人を管理する庁県制と蒙古を統治する旗制の二つの行政機関が併存することになった。

オルドス地区の開墾：1697（康熙 36）年に、清王朝はオルドス地区の陝西省と接する地帯で貧民たちの開墾を許し、陝西、山西と甘肅 3 省の漢人農民たちが次々とオルドス地区に入ってきた³⁴⁾。そして、1730 年に、清政府は漢人農民たちのオルドス高原における農業活動を制約するため、長城線より北 50 里以内のところでの開墾を認めた。しかし、これが 1743(乾隆 8)年になると、すでに「50 里以内」の限界を超えて漢人農民たちが河套地区にも姿を現してきたという³⁵⁾。オルドス地区の開墾は、アヘン戦争の前は長城、黄河の周辺地域と河套地区にとどまっていたが、戦争後の「全開放」政策によって、開墾は非常に激しくなり周辺地域から奥地まで進んだ。1902 年 5 月清政府は胎谷(イグウ)を開墾大臣に任命して内蒙古の西部烏藍察布盟、伊克昭盟とチャハル 8 旗の墾務を担当させた。記載によると、1904 年にオルドス左翼中旗のところでは東西 215 里、南北 225 里の草場が開墾されて耕地となったという³⁶⁾。こうした空前の大規模な開墾の結果、オルドス高原の中部、東部と河套地区の広い豊かな草原がわずか 2-3 年間のあいだに農地となり、オルドス高原は牧畜業地区から半牧畜業半農業地区へ転回した。

烏藍察布盟(ウランチャブ)の開墾:烏藍察布盟における開墾は、1661 年—1722 年の康熙年間、清王朝は蒙古のゾナーガル汗(ハン)国との戦いのため、烏藍察布盟にアラタイ軍台を設置したことから始まった。アラタイ軍台の食糧を供給するために、清王朝は烏藍察布盟の四子部落旗、達爾漢(ダルハン)旗と茂明安(モウミンガン)旗の 3 旗の牧場を開墾して耕地にしたという³⁷⁾。かつ同盟の河套地区から近いウラット 3 旗のところも河套地区の影響を受け、農業が発達していた。アヘン戦争後、烏藍察布盟における開墾は著しく激しくなり、清王朝はこのことに応じて 1903 年に烏藍察布盟に武川県と五原県の二つ県を設けている³⁸⁾。

チャハル草原における開墾:チャハル地区の開墾は、1661—1722 年の康熙年間、清政府が蒙古のゾナーガル汗国と戦うために、中原から漢人農民を募してチャハル右翼四旗の「官物場」を開墾し「耕地」にしたことから始まったという³⁹⁾。最初漢人農民たちはチャハルの長城と接する南部地区に農業活動をしていたが、農業人口の増加により次第に北上してチャハルの北部地区までに達するようになった。1724 年に、チャハル右翼四旗のところ約 29,000 ヘクタールの牧場が農地に転用された⁴⁰⁾。そして、1735—95 年の乾隆年間に右翼四旗の草原はさらに 28,000 ヘクタール開墾された⁴¹⁾。この蒙古チャハル草原地区へ北上し流入していく漢人農民たちの出身は、主に河北省であったという⁴²⁾。アヘン戦争後、開墾はさらに激しく行われ、1902 年前後には、右翼豊鎮と宗遠 2 庁のところすでに 11,000 ヘクタールの農地が開かれていた⁴³⁾。こうした大規模な開墾により、清の末ころ、蒙古チャハル草原の右翼四旗のところは、ほぼ全域が農地に転用された。

2、内蒙古東北地区の開墾

内蒙古東北地区のハラチン、赤峰地区と哲里木盟などの蒙古地区に流入した漢人農民たちの出身は、主に河北省と山東省の2省であったという⁴⁴⁾。

ハラチン地区:ハラチン地区は長城に近いので、早い時期に開墾された地区である。文献によると、1712(康熙51)年に、およそ10万人の山東漢人農民が蒙古ハラチン地区に流入したという⁴⁵⁾。清王朝はハラチン中旗の八溝地方で八溝直隸庁を設け、漢人のことと漢蒙交渉のことを管轄させた⁴⁶⁾。八溝は今の河北省の平泉県である⁴⁷⁾。そして、乾隆帝時代になると、1748年ハラチン貝子旗とジャサコ旗で開墾された草原面積は、それぞれ4,008,000㎡と4,003,100㎡となった⁴⁸⁾。さらに、1803年ハラチン中旗と左旗で農地に転用された草原面積は、それぞれ7,744ヘクタールと4,008ヘクタールであったという⁴⁹⁾。こうした開墾により、18世紀のはじめ頃には、ハラチン地区では、すでに農業区が形成された。

清王朝がハラチン地区に設けた県は以下の三つであった。

建昌県:1778 に設置した。今の遼寧省の凌源県。

朝陽県:1778 年に設置。今の遼寧省の朝陽県。

阜新県:1903 年に増設。今の遼寧省の阜新県⁵⁰⁾。

赤峰(ウラガンハーダ)地区の開墾:蒙古ハラチン地区が開墾されたあと、漢人農民たちは移民の目標をその北に位置する赤峰地区の各蒙古旗の土地に移した。そして次第に北上し、赤峰地区の敖漢(オーハン)旗、翁牛特(オンニユウト)旗、巴林(バガーリン)旗、奈曼(ナイマン)旗など旗のところにたぎつぎと入り込んだ。1750(乾隆15)年に、翁牛特旗で開墾された草原面積は292,625ヘクタールであったが⁵¹⁾、1762年にさらに1,000ヘクタールの草原が耕地に転用されたという⁵²⁾。1800年に敖漢旗のところで開かれた農地の面積は1,390ヘクタールであった⁵³⁾。アヘン戦争後、各旗草原の開墾は空前に達した。1885年、清政権は漢人農民を募して奈曼旗の南部にあたる草原地帯を全部開墾し耕地にした。1905年に札魯特(ジャルト)左右2旗と阿魯科称沁(アル・ホルチン)旗の3旗の面積18,000草場、巴林旗シラムルン河流域の面積8,600ヘクタールの牧場は姿を変えて耕地となった⁵⁴⁾。こうした大規模な開墾により、草原に恵まれていた赤峰地区は清の末ごろに半牧畜業半農業地区に転じた。

哲里木盟(ジイリム盟)の開墾:記載によると、清朝順治年間(1643-1661)に、高、董、楊、周、梁、劉といった漢人六姓の人が哲里木盟の科尔沁(ホルチン)左翼前旗に入り、秀水河沿岸に居住して、開墾した。哲里木盟の開墾史はこの「漢人六姓」から始まったという⁵⁵⁾。

科左前旗— 1822(道光 2)年、在住漢人農民は約 200 戸、開墾された草原面積は 77,000 ヘクタール⁵⁶⁾。

1823(道光 3)年、耕地になった草原面積は 1,500 ヘクタール。

1826(道光 6)年、増加した漢人農民の戸は 130、開墾された草原面積は 1,546 ヘクタール⁵⁷⁾。

科左中旗－ 1809(嘉慶 14)年、すでに耕地に転換された草原面積は 12,500 ヘクタール⁵⁸⁾。

1822(道光 2)年、在住漢人農民は約 200 戸、開墾された草原面積は 2,000 ヘクタール⁵⁹⁾。

1823(道光 3)年、在住漢人農民は約 255 戸、開墾された草原面積は約 2,000 ヘクタール⁶⁰⁾。

1826(道光 6)年、増加した漢人農民の戸は 760 戸⁶¹⁾。

科左後旗－ 1802(嘉慶 7)年、在住漢人農戸は 4,000 戸⁶²⁾。

1832(道光 12)年、懷徳・奉化・遼源の 3 県を設ける⁶³⁾。

郭尔羅斯(ゴルロス)前旗－ 1800(嘉慶 5)年、在住漢人農戸は 2,330 戸、耕地になった草原面積は 265,648 ヘクタール⁶⁴⁾。

アヘン戦争後、哲里木盟地区の開墾は最も激しく行なわれた。哲里木盟の北に位置する郭尔羅斯後旗、ジャライト旗と杜尔伯特(ドルブツト)旗の 3 旗のところで編入された漢人農民戸は 159,844 戸、1,220,558 人となり、これらの漢人農戸は当時の 3 旗蒙古戸の 8.9 倍、人口は蒙古人口の 9.8 倍となった⁶⁵⁾。そして、1902 年から 1908 年までのわずか 6 年間で哲里木盟の開墾された草原面積は、空前の 24 億 5000 万平方メートルに達したという⁶⁶⁾。

清王朝が哲里木盟地方に設置した県庁は以下のとおりである。

郭尔羅斯前旗:

農安県 1889 年に設置。今の吉林省農安県。

長嶺県 1908 年に設置。今の吉林省長嶺県。

徳恵県 1910 年に設置。

科尔沁左翼中旗:

奉化県 1877 年に設置。今の吉林省梨樹県。

懷徳県 1877 年に設置。今の吉林省公主嶺市。

康平県 1880 年に設置。ほぼ今の遼寧省の昌図県にあたる。

遼源県 1902 年に設置。今の吉林省双遼県。

科尔沁右翼中旗:

靖安県 1904 年に設置。ほぼ今の吉林省白城市にあたる。

醴泉県 1908 年に設置。今の吉林省通榆県の一部にあたる。

科尔沁右翼後旗:

安廣県 1905年に設置。ほぼ今の吉林省大安県にあたる。

鎮東県 1910年に設置。ほぼ今の吉林省鎮賚県にあたる。

科尔沁右翼前旗:

開通県 1904年に設置。ほぼ今の吉林省通榆県にあたる。

科尔沁左翼前旗:

彰武県 1903年に設置。今の遼寧省彰武県。

法庫庁 1906年に設置。今の遼寧省法庫県。

ジャライト旗

大賚庁 1904年に設置。ほぼ今の吉林省安達県の一部にあたる。

泰來設治局 1906年に設置。今の黒龍江省泰來県。

郭尔羅斯(ゴルロス)後旗:

肇州庁 1904年に設置。今の黒龍江省の肇州県。

杜尔伯特(ドルブット)旗:

安達庁 1906年に設置。今の黒龍江省の安達県⁶⁷⁾。

こうした中原漢人農民の大規模な開墾は、前後わずか6-7年のあいだに広大肥沃なホルチン草原を耕地にしてしまった。乾隆帝(1735年—95年)から嘉慶帝(1795年—1820年)までの時間を開墾の第一段階とすると、この段階の開墾は黄河と長城を沿った内蒙古の辺境地帯で行なわれた。そして、道光帝(1820-1850)から光緒帝(1874-1908)までの開墾を第二段階とすると、この段階の開墾の特徴は辺境地帯から北上し蒙古の奥地までに進んだことである。

この前後170年の間、内蒙古大草原は大きく変わった。西側のオールドス高原から東側のホルチン草原までの草原地帯で草原が消滅して耕地が広がり、遊牧による牧畜産業は、農業・半農業半牧畜産業に転化された。

第2節 中華民国の時代の内蒙古高原における開墾

1、北洋軍閥の内蒙古における開墾

1915年、北洋軍閥政権は今の内蒙古の五原県で「西蒙墾務分局」を設置し、オールドス地区の蒙古各旗で略奪的開墾を実施した。

内モンゴル高原における砂漠化の一要因（烏力吉図）

北洋軍閥政権時代のオルドス地区における開墾を表にすると、以下のようになる⁶⁸。

旗名	開墾する土地(計画)	そのうち開墾された土地	そのうち未開墾のままの土地
杭錦（ハンキン）旗	14,790ヘクタール	14,130ヘクタール	660ヘクタール
達拉特（ダラット）旗	3,900ヘクタール	2,047ヘクタール	1,853ヘクタール
ジュン・ワアン旗ジャサツ旗ウシン旗の3旗のところ	6,000ヘクタール	1,600ヘクタール	4,400ヘクタール

綏遠地区で開墾された草原の総面積は198,492ヘクタール、そのうち1914-1928年の間に開墾された草原の面積は118,932ヘクタールであり、総面積の59.4%を占めていた⁶⁹。

2、国民党政権時代の内蒙古における開墾

国民党政権は北洋軍閥政権に続き、今の内蒙古のオルドス地区とウランチャブ盟の2盟のところで略奪的開墾を実施した。

国民党政権時代のオルドス地区における開墾を表にすると、以下のようになる⁷⁰。

旗名	開墾する土地(計画)	そのうち開墾された土地	そのうち未開墾のままの土地
右翼前未旗	2,170余ヘクタール	2,170余ヘクタール	無
右翼前旗	1,580余ヘクタール	1,580余ヘクタール	無
右翼中旗	10,000余ヘクタール	729余ヘクタール	9,280余ヘクタール
右翼後旗	7,360余ヘクタール	7,360余ヘクタール	無
左翼前旗	1,930余ヘクタール	1,930余ヘクタール	無
左翼中旗	9,630余ヘクタール	9,630余ヘクタール	無
左翼後旗	13,480余ヘクタール	11,610余ヘクタール	1,870余ヘクタール

国民党時代のウランチャブ盟における開墾を表にすると、以下のようになる⁷¹⁾。

旗名	開墾する土地 (計画)	そのうち開墾さ れた土地	そのうち未開墾 のままの土地
喀尔喀右翼 旗	990余ヘクタール	990余ヘクタール	無
四子部落旗	21,320余ヘク タール	20,600余ヘク タール	730余ヘクタール
茂明安旗	34,080余ヘク タール	30,620余ヘク タール	3,460余ヘクタール
烏拉特後旗	13,380余ヘク タール	8,604余ヘクタール	4,776ヘクタール
烏拉特中旗	2,010余ヘク タール	1,710ヘクタール	300ヘクタール
烏拉特前旗	8,710ヘクタール	7,930ヘクタール	779ヘクタール

こうした大規模な開墾により、内蒙古高原の草原は急激に減り、家畜の数も大幅に減少した。オールドス地区の1936年の家畜数は、1930年に比べて75-80%までに減少した。

清・民国時代に、漢人農民が内蒙古高原でおこなったこの大規模な開墾は、樹木や草を焼き払うことによる焼き畑方式の開墾であったことが指摘されなければならない。

歴史地理上でオールドス高原、チャハル南部トルソ・ノール、上都地区及び赤峰地区は草原だけではなく、有名な「松林の地」でもあった。しかし、清から民国にかけてのわずか300年の間、焼き畑によって、これらの地域の草原や森林はほぼ姿を消した。

蒙古高原における焼き畑は、漢・唐・清・民国の時代だけではなく、解放後の「10年動乱」の時にも、内蒙古の東北地区では、一時焼き畑がおこなわれていた。このような、漢人農民が蒙古高原で行った焼き畑開墾は、自然環境を破壊し、内蒙古高原に砂漠化をもたらした。

第3節 開墾と内蒙古草原の砂漠化

1、アラサン地区の砂漠化

アラサン地区は元々は匈奴の右翼王の遊牧地であり、祁連山の豊かな水に恵まれた豊富な草原地帯であった。前121年ごろ、漢朝がアラサン地区に武威郡と張掖郡の2つの郡を設けたことから、この地域は中原各王朝の西部地域における主要な農業生産地の役を果たしていくことになった。こうして、内蒙古高原の土壌はもともと表土が薄いのが、上述したように、長期に渡っての大規模な開墾は草原を耕地にしてしまった。地力維持に努力しないため、地力が衰退し、表土が流出して、土地の砂漠化が急速に進んだ。

内モンゴル高原における砂漠化の一要因（烏力吉図）

ブダンジラン砂漠:今のブダンジラン砂漠の西部と西南部のところは、昔は広い草原地帯であったと考えられる。漢、唐の時代に、この地域で草原を開墾し、耕地にして大規模な農業生産を図っていた。今はその耕地の姿が全く見えなくなり、全部砂漠に埋もれ、ブダンジラン砂漠となってしまった。その時の有名な居延海は、ブダンジラン砂漠に襲われる運命から逃げられず、枯渇し死の海となった。

テンギリ砂漠:漢、唐にかけての武威郡の管轄地であった。その当時、中原王朝の西部地区における大規模な農業生産地は、今のテンギリ砂漠地帯に当る地域であった。今はこのあたりの農業生産地は、すでに過去のこととなり、実際の姿は全部砂に埋れて砂漠となってしまっている。そして、武威市それ自体も今はテンギリ砂漠に埋れるおそれに直面している。

2、オールドス地区の砂漠化

ウランブハ砂漠:地理的には黄河に沿っている地域であり、農業の理想的な場所でもあった。秦、漢の時代は、ここに朔方郡を設けて、大規模な農業を開いていた。そして、清政権になると、再び農業生産をはかり、オールドス地区の中では早くから開墾されていた。とくに民国時代には、この地域の開墾は非常に激しく行なわれた。

クビチ砂漠：前述したように、漢時代の朔方郡のところであり、漢朝の北方地区における重要な食糧生産地の一つであった。清・民国時代には開墾がさらに進められた。

モウオソ砂漠:地理的には陝西省の榆林県とつながり、蒙古オールドス地区の中原と接する辺境地帯である。前述したように、秦、漢時代の上郡のところであり、両漢の北方地方における重要な食糧生産地であった。そして、清・民国の時に、開墾できるところは開墾し尽くして、草原は永遠にこの土地から消されてしまった。中国の環境問題を長期にわたって研究している小島麗逸教授はオールドス地区の砂漠化問題について、次ぎのように書いている。「内蒙古の伊克昭盟(オールドス)地区では67万haが開墾されたため、この数年来、砂漠化面積は154万haから456万haへと拡大し、草原面積の80%に及んでいる」⁷²⁾。小島教授のこの言葉からも、私たちは、蒙古高原における開墾が環境に対しては大きな影響を与えていることがわかる。

3、チャハル地区の砂漠化

フンシャンダク砂漠:フンシャンダク砂漠は主にチャハル右翼四旗とドーロン県、宝昌県のところで分布している。これらのところはいずれも長城から近いところであり、開墾された時代も早く、しかも、開墾は徹底的であった。清朝前期までもこれらの地域では草原や森林地帯がつながり、清王朝の「官牧場」や「皇帝狩場」が付いていた場所でもあった。

4、東北地区の砂漠化

ホルチン砂漠:ホルチン砂漠は主に哲里木盟(ジィリム盟)のホルチン左翼三旗、ナイマン旗、

庫倫旗と赤峰(ウラガンハーダ)市のオウハン旗、翁牛特旗、克什克騰旗などの幅広いところで分布している。これらのところではシラムルン河、ロウハー河、教來河、柳河、西遼河などの河川が流れ、ホルチン大草原は昔から蒙古高原で有名な草場であった。清朝の康熙帝の時からこの地域で開墾が始まり、それがアヘン戦争後の清政権と民国時代の激しい開墾を経てホルチン大草原のほぼ全域が耕地に転用された。蒙古人は今までも「ホルチン大草原」と言葉を使っているのは、その時のことを忘れたくないためであろう。

おわりに

内蒙古高原では河川は少なくない。黄河水、永定河、西遼河、ノ - ン江とエリグナ河などの外流水系とウラガイ河、シリンゴール河、シラムラン河、エチナ河などの内流河がある。湖も少なくない。降水量は年間平均 400mmであり、地下水も豊富である。したがって、内蒙古高原の砂漠化の成因は、水資源・雨水などが少ないという自然環境にあるのではなく、社会的・人為的要因のほうが大きい。その人為的要因の主要な一つを、私は、中原漢人農民の内蒙古高原における農耕活動に求めた。

アラサン地区は元々は匈奴の右翼王の所領遊牧地であり、匈奴帝国の西北における重要な遊牧産業の生産地となっていた。今のアラサン地区に位置するブダンジラン大砂漠とテンギリ大砂漠は、漢から唐にかけての時代に形成された。中原漢人農民の大規模な開墾により、草原と表土が破壊されたことが、大砂漠が形成された根本的な要因である。

オールドス高原はアラサン地区と同じく漢の北方地区における重要な農業生産地となっていたが、これが後漢末期から、匈奴・鮮卑の漠南地区における統治を回復と突厥族の南下にともない、オールドス地区の産業は農業が牧畜業に代替され、牧畜業が主な産業となった。そして、遊牧民族の自然と共存する自然的意識とそれに応じた牧畜産業の遊牧特徴によって、オールドス高原の環境が回復したのである。しかし、オールドス高原の黄河沿い地域と南部に位置する三大砂漠の最初の形成には、漢時代の開墾がかなりの影響をもっている。三大砂漠が拡大して今のようになり、地域産業、住民生活及び気候にまで影響力をもつようになったのは、草原を耕地にし、地域の牧畜業を農業に転じさせた清・民国時代の無計画的かつ大規模な開墾に、その原因を求めべきである。

チャハル地区とホルチン大草原は清の前期までは無限の草原地帯であった。今はこの二つの地域にそれぞれフンシャンダク砂漠とホルチン砂漠の2つの砂漠が形成され、地域住民の生活に非常な苦しみを与えている。フンシャンダク砂漠とホルチン砂漠が形成されたのは清朝中期乾隆(1735-1795)から民国(1912-1947)にかけてのことで、この時期に中原漢人農民の開墾活動が盛んにおこなわれた。

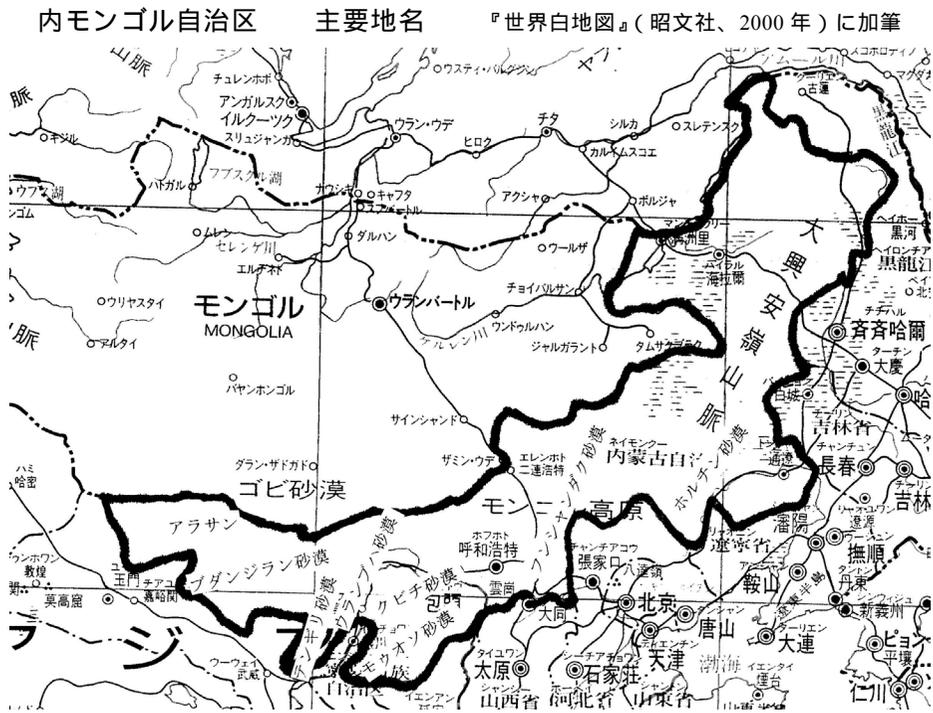
以上のように、これら一連の農業開発が、この草原地帯を砂漠化したのである。とりわけ、

漢から民国にかけての時代に、中原漢人農民が内蒙古高原で行った開墾の方法が焼き畑であったことは強調されるべきことがらであると指摘しておかなければならない。

<注>

- 1) 『漢書』卷24下、食貨志第4下、中華書局、1975年。
- 2) 前掲、『漢書』卷24下、食貨志第4下。
- 3) 『史記』卷29河渠書、中華書局、1972年
- 4) 周清澍『内蒙古歴史地理』、38頁、内蒙古人民出版社、1993年。
- 5) 『後漢書』卷1下、光武帝紀下、中華書局、1973年。
- 6) 『晋書』卷14、地理上、中華書局、1974年。
- 7) 『漢書』卷94上、匈奴列伝。
- 8) 前掲、『漢書』卷28下、地理志下。
- 9) 前掲、『後漢書』志23、郡国5。
- 10) 『晋書』卷14、地理上。
- 11) 『魏書』卷106、地形志、中華書局、1974年。
- 12) 『隋書』卷29、地理志、中華書局、1973年。
- 13) 前掲、周清澍『内蒙古歴史地理』、64頁。
- 14) 『新唐書』卷40、地理志4、中華書局、1975年；『旧唐書』卷40、地理志3、中華書局、1975年。
- 15) 前掲、『新唐書』卷40、地理志4、『旧唐書』卷40、地理志3。
- 16) 『明史』地理3、中華書局、1974年。
- 17) 前掲、『史記』・『漢書』匈奴列伝。
- 18) 前掲、『漢書』武帝紀。
- 19) 前掲、『漢書』卷24下、食貨志4下。
- 20) 前掲、『史記』河渠書。
- 21) 前掲、『漢書』卷94下、匈奴列伝。
- 22) 前掲、周清澍『内蒙古歴史地理』、38頁。
- 23) 前掲、『後漢書』卷89、南匈奴列伝。
- 24) 前掲、『後漢書』卷90、烏丸・鮮卑列伝。
- 25) 前掲、『後漢書』卷8、靈帝紀。
- 26) 前掲、『後漢書』獻帝紀；『晋書』卷40、地理志下。
- 27) 前掲、『後漢書』烏丸・鮮卑列伝。
- 28) 前掲、『魏書』卷4上、世祖紀4上。
- 29) 前掲、『旧唐書』卷38-40、地理志；前掲、『新唐書』卷37・卷43下、地理志。
- 30) 前掲、『新唐書』突厥上；『新唐書』卷37地理志一。
- 31) 『土默特旗志』卷一。
- 32) 『清高宗實錄』卷198、中華書局、1985年。
- 33) 『土默特志』卷5。
- 34) 色音『蒙古遊牧社会の変遷』、46頁、内蒙古人民出版社、1998年；前掲、周清澍『内蒙古歴史地理』、205頁。
- 35) 『河套図志』卷4。
- 36) 『清德宗實錄』卷152、中華書局、1986年。
- 37) 『清太宗實錄』卷11、中華書局、1986年。
- 38) 『清史稿』卷60・地理志、中華書局、1972年。
- 39) 阿岩、烏恩『蒙古族經濟發展史』、232頁、遠方出版社、1999年
- 40) 前掲、色音『蒙古遊牧社会の変遷』、38頁。
- 41) 『清高宗實錄』卷1050。
- 42) 前掲、色音『蒙古遊牧社会の変遷』39頁。
- 43) 前掲、周清澍『内蒙古歴史地理』224頁。
- 44) 前掲、周清澍『内蒙古歴史地理』177頁；前掲、色音『蒙古遊牧社会の変遷』、42頁。
- 45) 『清聖祖實錄』卷250、中華書局、1985年。
- 46) 前掲、周清澍『内蒙古歴史地理』、178頁。

- 47) 前掲、周清澍『内蒙古歴史地理』、178頁。
- 48) 『大清会典事例』巻977・巻981、(台湾)中文書局総發行。
- 49) 『蒙古族通史』巻4。
- 50) 前掲、周清澍『内蒙古歴史地理』、178～179頁。
- 51) 『蒙古族通史』巻4。
- 52) 前掲、『清聖祖実録』巻191。
- 53) 『蒙古族通史』巻4。
- 54) 前掲、『清徳宗実録』巻220。
- 55) 徐世昌『東三省政略』、巻2、文海出版社。
- 56) 前掲、色音『蒙古遊牧社会の変遷』、49頁。
- 57) 前掲、色音『蒙古遊牧社会の変遷』、39頁。
- 58) 『蒙古族通史』巻4。
- 59) 前掲、『大清会典事例』巻978。
- 60) 前掲、色音『蒙古遊牧社会の変遷』、49頁。
- 61) 前掲、色音『蒙古遊牧社会の変遷』、49頁。
- 62) 前掲、色音『蒙古遊牧社会の変遷』、39頁。
- 63) 前掲、『清史稿』巻55・地理志。
- 64) 前掲、『大清会典事例』巻978。
- 65) 前掲、『東三省政略』。
- 66) 前掲、阿岩・烏恩『蒙古族經濟発展史』、284頁。
- 67) 前掲、周清澍『内蒙古歴史地理』、165～171頁。
- 68) 前掲、色音『蒙古遊牧社会の変遷』、21～22頁。
- 69) 前掲、阿岩・烏恩『蒙古族經濟発展史』、286頁。
- 70) 前掲、色音『蒙古遊牧社会の変遷』、27～28頁。
- 71) 前掲、色音『蒙古遊牧社会の変遷』、27～28頁。
- 72) 前掲、色音『蒙古遊牧社会の変遷』、26頁。
- 73) 小島麗逸「環境生態系問題() 1982年の環境・生態系状況」、『中国経済』1997年3月号。



【参考資料】

わが故郷/ダシドルジーン・ナツァグドルジ/岡田和行 訳（一部抜粋）

『アジア理解講座「モンゴル文化を味わう」報告書』（国際交流基金センター、1997年）

ヘルレン、オノン、トーラの清く澄んだ河々

あまねく民人の葉となった小川、湧き水、鉱泉の数々

フスグル、オブス、ボイルの深く青い湖

人畜の飲み水となった沼沢地や泉の数々

これが私の生まれた故郷

モンゴルのうるわしき国

オルホン、セレンゲ、フフィのとくに美しき川々

鉱物資源の粋を集めた山や峠の数々

いにしえの石碑、遺跡、城址の数々

遠き地へと伸びた広く平坦な道の数々

これが私の生まれた故郷

モンゴルのうるわしき国

ハンガイとゴビの間に横たわるハルハの広大な故土

幼きころから縦横無尽に疾駆した大地

巻狩りで野獣を捕らえた長き山丘の数々

駿馬の速さを競い合った美しき谷原の数々

これが私の生まれた故郷

モンゴルのうるわしき国

風先に揺れる繊細な新緑あり

広く明るい草原にきらめく珍しき形の屋気楼あり

義侠の徒の集える地勢険しき地あり

古くから祭祀の行われた須彌のような大きなオボーあり

これが私の生まれた故郷

モンゴルのうるわしき国

アルタイ山脈と興安嶺の間に豊かな処女地ある国

私の父母が住む永遠に運命づけられた故郷

金色の陽光の下に平安に栄える国

銀色の月光の下に永遠に輝く地

これが私の生まれた故郷

モンゴルのうるわしき国

主指導教員（藤井隆至教授）、副指導教員（佐藤芳行教授・西澤輝泰教授）